

# 「外国語活動」授業力を備えた教員養成のための シラバスに関する一考察

物井尚子<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>千葉大学・教育学部

## A Trial to Develop a Syllabus for Prospective Elementary School Teachers to Try Their Ability to Teach Foreign Language Activities

MONOI Naoko<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>Faculty of Education, Chiba University, Japan

本研究の目的は、平成22年度より公立小学校で実施される「外国語活動」を指導できる教員を養成するために、大学が提供すべきことは何かを考えるための基礎調査である。現在、「外国語活動」の指導は学級担任に任せられている。よって、「外国語活動」指導に必要な知識と技術力を有する小学校教員の育成は教員養成課程の必須課題となっている。本稿では、小学校教員養成課程に所属する学生が将来「外国語活動」を十分に指導できるよう、小学校英語に初めて触れる「総合的な学習の時間（小学校英語入門）」という半期科目に焦点を当て、履修前後の受講者の小学校英語についての知識、および不安感の変化を調査した。

The purpose of this study is to conduct a basic survey in order to find out what universities which have teacher-training courses could offer for prospective elementary school teachers to teach *Foreign Language Activities*. Currently, the *Foreign Language Activities* lessons are mainly taught by homeroom teachers. Therefore, one of the crucial goals for the teacher-training courses of universities is to help prospective teachers to possess the knowledge and skills necessary for carrying out these lessons. In this paper, students who belong to the elementary school teacher-training course at the Faculty of Education at Chiba University and took a course, “Period for Integrated Study (Introduction for English for Elementary School Students)” were asked about their knowledge and anxiety of English for Elementary School Students at the beginning and at the end of the course and the results were compared.

キーワード：小学校英語（English for Elementary School Students） 外国語活動（Foreign Language Activities）  
教員養成（Teacher Training） カリキュラム開発（Curriculum Development） 不安（Anxiety）

### 1. はじめに

#### 1.1 研究の背景

平成22年度より新小学校学習指導要領（文部科学省，2008d）が実施される。これにより、公立小学校の高学年に対して「外国語活動」（年間35時間）が指導されることになる。週に1時間（45分）という頻度で5，6年生は外国語（英語）に触れる。領域という扱いでの導入であるため、検定教科書は存在せず、児童に対する評価もない。文科省が示す外国語活動の目標は、外国語のスキル習得ではなく、それを通じて「コミュニケーション能力の素地を養う」ことにあるという（文部科学省，2008c）。

児童のコミュニケーション能力の素地づくりをするための45分は誰が担当するかであるが、これは「外国語活動」の前身である総合的な学習の時間の中で扱われてきた英語活動（国際理解教育の一環として）での状況から、引き続き、学級担任が全体の90%以上を占めることにな

るだろう（表1参照）。ここにはALT（Assistant Language Teacher）が含まれていないが、同資料の別の集計結果によれば、平成19年度時点で小学校5年生の65.9%，6年生の65.4%の授業にALTが参加、つまり授業時間全体の何割かはALTと学級担任とのチーム・ティーチングで実施されていることになる。

以上のように外国語活動において、学級担任の指導力の向上は喫緊の課題である。2008年から開始された現職教員研修については、指導者養成研修（各小学校校長等が参加）、中核教員研修（各小学校より2名が参加）の2種類があるが、ともに各校の代表者が参加することになっており、外国語活動を担当する学級担任全員に実施されるものではない。あくまで、両研修に参加した教員が中心となり、定期的な校内研修を実施することが望ましい（2年間で30時間を目安）とされている程度である（松川・大城，2008）。研修制度を判断材料にすると、学級担任が週1時間の外国語活動を指導するだけの知識と技術を保持しているかどうかについては、かなりの個人差が生じていると推測される。今後は、教員研修以上に教員養成に期待されるべき点は大きく（物井，2010），

連絡著者：物井尚子

表1 英語活動指導者別時間数（第5，6年）

	第5学年	第6学年
学級担任	300,303時間 (94.6%)	310,171時間 (94.0%)
英語指導担当教員	6,189時間 (1.9%)	6,229時間 (1.9%)
中学校・高等学校の英語教員	2,545時間 (0.8%)	4,052時間 (1.2%)
特別非常勤講師	4,510時間 (1.4%)	4,870時間 (1.5%)
その他（校長・教頭など）	3,990時間 (1.3%)	4,496時間 (1.4%)
計	317,537時間 (100%)	329,888時間 (100%)

（文部科学省「小学校英語活動実施状況調査集計結果」2008c）

小学生に対する外国語活動を担える即戦力を輩出する必要がある。文部科学省からも小学校免許の教職課程を持っている大学宛てに、外国語活動に対応する授業を提供するようにとの通達があったほどである（文部科学省、2009a）。

JACET教育問題研究会（2009）の調査によれば、全国には英語科課程認定大学・短期大学が439校あり、そのうち、小学校英語教育に特化した科目を設置した教育機関は38%となっている。有効回答数が101校であったこと、小学校免許の教職課程を持っている大学・短期大学を全ては網羅していないことを考慮すると、小学校免許の教職課程を有する教育機関で小学校英語教育に特化した科目を設置している学校の割合はさらに低くなると予想される。

### 1.2 研究の目的

本研究では千葉大学教育学部で提供されている「総合的な学習の時間（小学校英語入門）」（筆者担当）を履修する小学校教員養成課程の学生が、本科目を受講する前の時点で、将来の「外国語活動」指導について何が必要であると考えているか、そしてどんなことに不安を感じているのか、また本科目受講後に、彼らの必要性は満たされ、不安は十分に払拭されているのかについて調査する。そして、その結果から、より実践的で学生に役立つ外国語活動指導のための授業シラバスを提案するものである。1 専門科目（半期15回）が学生にどれだけの影響を与えられるかを知る貴重な資料となる。

本題に入る前に「総合的な学習の時間（小学校英語入門）」の小学校教員養成課程全体での位置づけを簡単にまとめておきたい。小学校教員養成課程に属する学生は卒業に必要な124単位中8単位を小学校課程に関する科目（39単位）の中から履修することになっている。外国語活動に対応する科目として、①本科目に加え「②総合的な学習の時間（小学校英語の音声指導）」「③総合的な学習の時間（小学校英語演習）」「④総合的な学習の時間（小学校英語実践）」の計4科目が小学校課程に関する選択科目として提供されている。同時にこれらの科目は

小学校教員養成課程異文化コミュニケーション選修に所属する10名ほどの学生たちの必修科目（①②）、選択必修科目（③④）となっている。よって、①～④ともに履修者の中心は異文化コミュニケーション選修の学生であるが、加えて小学校教員養成課程の他選修の学生も履修する。また履修学年は1～4年次（①②）あるいは2～4年次（③④）という設定になっているために、1年生が半数、後は様々な学年が履修している。これらの科目は課程全体の必修科目ではないために、小学校教員養成課程に入学しても、外国語活動さらには小学校英語というものに触れずして卒業する者もいる。①については今年度の履修登録者（聴講生も含め）は39名であった。受講者数は例年同数を推移しているとのこと、また課程全体の定員が245名であることを考えると、およそ課程に属する1学年の約15%が履修していると考えられる。4科目間の関係としては①から④の順に履修してもらうことが望ましく、①②で基礎知識を蓄えた後、③では外国語活動の指導案を作成、授業のデモンストレーションを行う。その経験をもとに④では実際に千葉市内の公立小学校に出向き、「外国語活動」の時間に小学生を指導することになる。

本研究では、平成22年度に「総合的な学習の時間（小学校英語入門）」（前期15回）を履修した学生（1～4年）を対象とし、本科目の履修によって(1)小学校英語に関する知識の増強は可能か、(2)小学校英語に対する不安感の払拭は可能か、に焦点を絞り質問紙による調査を実施した。次章では、授業で使用したシラバスについて述べる。

### 1.3 授業のシラバスについて

本科目は小学校教員養成課程の全学生にとって小学校英語の窓口になる科目であり、そして異文化コミュニケーション選修の学生にとっては1年次からの必修科目であるというカリキュラム上の位置づけから1年生の受講者が多い。そのことを踏まえ、小学校英語に関する情報を広く浅く、実践的な内容を盛り込みながら、公立小学校での外国語活動がどのようなものかを把握しやすいようにシラバスを作成した。

シラバスを作成する際、小林・宮本（2007）による効果的な早期英語教育者研修プログラム作成の枠組みを参考にした（表2参照）。両氏は早期英語教育の研修領域を6つに分け、それぞれに研修項目を用意した。全15回という時間的制約、また他の3科目で指導できる内容を考慮し、本授業での指導範囲は、研修領域A～Dにとどめ、これをもとに15回の授業で扱う項目を決定した。

表2 早期英語教育指導者研修プログラムの枠組み

研修分野	研修領域
早期英語教育の理論と実践（専門的知識・技能基盤）	A. 基礎知識（approach）
	B. 教授法（method）
	C. 指導技術（technique）
	D. 指導者の自己開発（development）
英語運用能力	E. 英語運用能力（English）
指導実践	F. 指導実践（practicum）

（小林・宮本，2007）

早期英語教育の基礎知識には、公立小学校に外国語活動が導入されるまでの経緯、特に1992年に初めて公立学校での英語活動が実践されたことから2002年の総合的な学習の時間内での国際理解教育、そして2011年での外国語活動実施という過去20年の歴史を指導内容に加えた。また、他大学で開講されている同様の科目、市販の小学校教員研修用テキスト（岡・金森，2007；久埜・佐藤・永井・粕谷，2006；直山，2008；松川・大城，2008；吉田，2008），筆者の他大学での指導経験（物井，2010）を参考にシラバスを作成した（表3参照）。

また、「外国語活動」の導入に際し、文部科学省が目標とする「コミュニケーション能力の素地を培う」という基本理念を常に受講者に意識してもらうため、指導内容、指導技術、教材・教具、指導計画、評価のより具体的、実践的な内容を扱う場面においても、学習指導要領（文部科学省，2008d）を適宜参照する形で授業を進めた。

表3 外国語活動指導法シラバス

1	オリエンテーション：本科目の授業展開，課題，評価に関する説明，小学校英語教育の意義と目的
2	新学習指導要領のねらいと外国語活動導入までの歴史を振り返る
3	子どもの言語習得（第一言語と第二言語）
4	児童・発達心理学の観点からみる子ども（動機，態度，自尊心）
5	英語教授法の基礎
6	シラバス・デザインの意義（年間・単元シラバス）
7	レッスン・プランの基礎・基本
8	リスニングの指導
9	スピーキングの指導
10	リーディングの指導
11	ライティングの指導
12	歌・チャンツを用いた指導
13	絵本を用いた指導
14	言語能力の測定と評価
15	まとめ

## 2. 方 法

### 2.1 参加者

2010年4月から7月までの半期間、千葉大学教育学部小学校教員養成課程にて「総合的な学習の時間（小学校英語入門）」を履修した学生である。39名が受講した（うち35名が履修，4名が聴講）。授業は毎時間100名が収容できる大教室で行われた。初回の授業前、及び最終回の講義終了後に実施した2回の質問紙に記入した32名を参加者とした。

### 2.2 データ収集の手順

初回の講義において、履修者の小学校英語に関する知

識、および不安について質問紙による調査を実施した。全15回の講義終了後、再び同質問紙による調査を行った。これにより、履修者はどの内容に関する知識が増えたか、そして、それらに対する不安感を何についてどの程度払拭したか調査した。質問紙は5件法を用い、加えて記述による回答が可能な欄を用意した（資料1参照）。

### 2.3 質問紙について

質問紙は、物井（2010）で使用したものをベースにし、本研究用に修正を加えたものである（資料1）。授業内で扱う39項目を列記している。これらは15回の授業のいずれかで触れた内容であり、項目順と指導順序は一致していない。早期英語教育の理論と実践、外国語活動導入の経緯、小学校課程での位置づけ、学習指導要領に関する項目が含まれている。それぞれの項目に関する知識（項目の内容を十分に理解しているか）と不安感（自らが教壇にたつことを考え、項目の内容について不安があるか）を5件法で質問した。加えて知識と不安感の各々に自由記述欄を設けて、回答者が39項目以外に知っておくべきだと思うこと（授業で扱うべきと考える内容）を、そして不安に感じることを記入してもらうこととした。

### 2.4 データ分析

データ分析を行うにあたって、まずは(1)質問紙項目の信頼性を確認、その後、(2)理解度、不安感の変化について特徴的な項目を見つける作業を行った。次に、(3)「総合的な学習の時間（小学校英語入門）」を受講する前後において、参加者の知識、不安感の変化が統計的に有意であるかを調査した。(2)の分析にはWinsteps Version 3.69.1.16 (Winsteps, 2010) を使用しラッシュモデルを、(1)(3)の分析にはSPSS 12.0 (SPSS, Inc., 2003) を使用し、(1)記述統計と(3)対応のあるサンプルのT検定を行った。

## 3. 結果と考察

### 3.1 質問紙項目の信頼性

質問紙の記述統計は表4のような結果となった。質問紙39項目の知識（受講前、受講後）、不安感（受講前、受講後）の記述統計（項目要約統計量）を示している。信頼性については39項目全体のクロンバックの $\alpha$ 係数として算出される数値を記載した。すべて0.94以上という非常に高い値が得られた。

表4 記述統計（項目要約統計量）

	平均値	最小値	最大値	範囲	最大値/最小値	分散	項目数	Cronbachの $\alpha$
知識(前)	2.21	1.55	2.97	1.41	1.91	.09	39	.96
知識(後)	3.99	3.13	4.55	1.42	1.45	.09	39	.94
不安感(前)	3.49	2.73	4.00	1.27	1.46	.06	39	.95
不安感(後)	2.70	2.03	3.21	1.17	1.58	.07	39	.96

引き続き、受講後の参加者の知識、不安感の変化をみるために、ラッシュモデルを用い、学習者の質問紙への

解答を対数に変換，それに基づいて特徴的な項目を拾い出す作業を行った。これを次章にまとめる。

### 3.2 知識の変化

先の39項目について，履修者の知識の変化を履修前，履修後で比較したところ，知識が全項目にわたって向上していることがわかった（図1参照）。また，この履修前後の伸び率については有意差がみられた ( $t = -12.60$ ,  $df = 31$ ,  $p < .001$ )<sup>2</sup>。

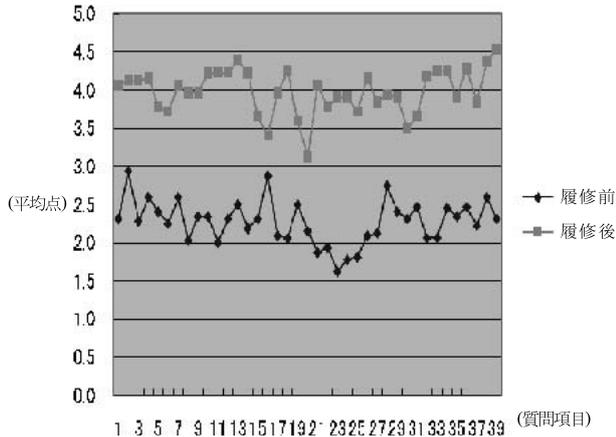


図1 履修者の授業内容に関する理解度の比較 (上段が履修後，下段が履修前)

どの項目について履修者が自信をもって理解していると認識しているのか，また理解している度合いが低いと感じているのかを調べるため，39項目中数値が1標準偏差を超えるものを受講前，受講後で比較する。履修前は小林，宮本（2007）による研修領域でいうと，A基礎知識（用語の定義，これまでの経緯）とC指導技術（教室

表5 履修者が知識があると考える授業内容

履修前	順位	履修後
2. 日本の公立小学校で外国語教育をはじめの意義(A) (-1.10)	1	39. 絵本を用いた指導(C) (-1.68)
16. 英語の発音のコツ(E) (-1.00)	2	13. 授業で指導する内容(B) (-1.13)
28. ALTとの関わり方(C) (-.80)	3	38. 歌・リズムの指導(C) (-1.11)
38. 歌・リズムの指導(C) (-.55)	4	36. スピーキングの指導(C) (-.80)
7. 「外国語活動」の時間と中・高の英語とのつながり(A) (-.55)	5	34. リスニングの指導(C) (-.70)
4. 公立小学校における英語導入の現状(A) (-.55)	6	33. 高学年に対する指導(C) (-.70)
	7	21. 教員が授業で使う教具の上手な選び方(C) (-.70)

注：括弧内のアルファベットは研修領域（小林・宮本，2007），括弧内の数字は尺度項目の数値。

での指導技術や早期英語に特徴的な活動についての知識）に関するものがあつたが，履修後は，C指導技術に関する項目が上位を占めた。実際に児童をどのように指導していくか，授業で使用する活動例を多く紹介したことが受講者に実際に児童を指導する様子をイメージさせ，それが記憶に残ったのかもしれない（表5参照）。

一方，履修者が自身の知識が乏しいと考える項目は次のとおりである（表6参照）。履修前はB教授法（指導方針・指導計画・指導方法および英語教育一般についての知識）とC指導技術に関する項目に回答が集中したが，授業後は項目が大きく入れ替わり，マルチメディアや音声教材の活用法，自身の発音や習得すべき文法事項，海外の英語教育事情，発達心理学に関する項目と内容が多岐にわたっている。いずれも授業中に多くの時間を割いて指導できなかった項目であり，今後の指導に際し，内容の充実を必要とする部分である。

表6 履修者が知識が乏しいと考える授業内容

履修前	順位	履修後
23. カリキュラム（1年間の指導計画）の作り方(B) (1.35)	1	20. インターネット，電子黒板などのマルチメディア活用法(C) (1.89)
24. 1単元（2～4クラス）の組み立て方(B) (.95)	2	16. 英語の発音のコツ(E) (1.35)
25. 指導案（1クラス）の書き方(B) (.88)	3	30. アジア（台湾，韓国，中国）の英語教育(A) (1.16)
21. 授業で小学生が使う教材の上手な選び方(C) (.75)	4	19. CD，DVDなどの音声教材活用法(C) (.96)
22. 授業で小学生が使う教材の上手な作り方(C) (.61)	5	15. 教員が知っておいたほうがよい文法事項(C) (.83)
11. 外国語活動で使用できる教授法(B) (.49)	6	31. 児童・発達心理学の観点からみる子ども（動機，態度，自尊心）(A) (.83)

注：括弧内のアルファベットは研修領域（小林・宮本，2007），括弧内の数字は尺度項目の数値。

### 3.3 不安感の払拭

続いて，講義内容の39項目について履修者が不安感を払拭できたかをたずねた結果，不安感がほぼ全項目にわたって低下していることがわかった（図2参照）。また，この履修前後の低下率については有意差がみられた ( $t = 5.703$ ,  $df = 31$ ,  $p < .001$ )<sup>2</sup>。次に，数値の下がり方が大きい項目，小さい項目を先程と同様に選択し，講義によってどの項目の不安感を拭き去ることができたのか，あるいはできなかったのかを次に示す。

表7をご覧ください。履修者が不安に感じない授業内容を履修前後で比較するとそれぞれ次のような項目が選択された。履修前後ともにC指導技術に関する回答が多く寄せられ，同じ項目が挙げられている（項目38，

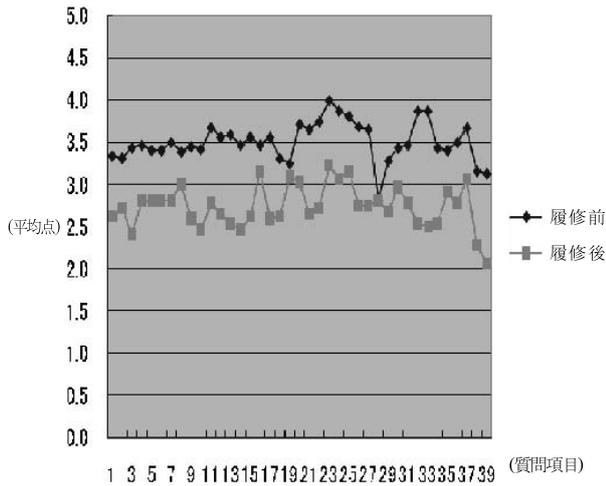


図2 履修者の授業内容に関する不安感の比較  
(上段が履修前、下段が履修後)

39)。また、灰色で示した上位項目は、履修前後それぞれにおいて、履修者が自身の知識が広いと判断した項目と重複しており、十分な知識があるからこそ、不安に感じないという相関を見て取ることができる。

表7 履修者が不安に感じない授業内容

履修前	順位	履修後
28. ALTとの関わり方(E) (1.10)	1	39. 絵本を用いた指導(C) (1.25)
39. 絵本を用いた指導(C) (.61)	2	38. 歌・リズムの指導(C) (.81)
38. 歌・リズムの指導(C) (.56)	3	3. 公立小学校における英語導入の背景(A) (.57)
19. CD, DVDなどの音声教材活用法(C) (.44)	4	10. 教室内でできる外国語活動に向けての環境づくり(C) (.46)
29. 子どもの言語習得(A) (.39)	5	14. 教員が授業で使える英語表現(C) (.46)

注：■は履修前、履修後、それぞれにおいて、学生が知識が広いと感じた項目である。

表8をご覧いただきたい。受講者の不安が高かった項目は、次のような項目群であった。受講前に不安のあったカリキュラム、単元計画、指導案の作成については不安を拭い去ることができなかつたのがわかる。また、灰色で示した項目は学生が履修前と後、それぞれで知識が不足していることを認識している項目であり、それらが学生の不安につながっていることは、先述した知識と不安の相関がこちらでも見られたといえよう。特に英語の発音については学生が知識不足を履修後に痛感しており、そのことが同じく履修後の不安項目として残っていることが非常に興味深い。

#### 4. 結 論

履修者は「総合的な学習の時間（小学校英語入門）」を受講することにより、小学校英語に関する知識を得る

表8 履修者が不安に感じる授業内容

履修前	順位	履修後
23. カリキュラム（1年間の指導計画）の作り方(B) (-.89)	1	23. カリキュラム（1年間の指導計画）の作り方(B) (-.81)
33. 高学年に対する指導法(C) (-.64)	2	25. 指導案（1クラス）の書き方(B) (-.69)
32. 低学年に対する指導法(C) (-.64)	3	16. 英語の発音のコツ(E) (-.69)
24. 1単元（2～4クラス）の組み立て方(B) (-.64)	4	19. CD, DVDなどの音声教材活用法(C) (-.59)
25. 指導案（1クラス）の書き方(C) (-.51)	5	37. ライティングの指導(C) (-.54)
22. 授業で小学生が使う教材の上手な作り方(C) (-.40)	6	24. 1単元（2～4クラス）の組み立て方(B) (-.54)
	7	20. インターネット、電子黒板などのマルチメディア活用法(C) (-.49)
	8	8. 小学校教員のための「外国語活動」研修(F) (-.44)

注：■は履修前、履修後、それぞれにおいて、学生が知識が乏しいと感じた項目である。

ことができた。履修前に知識が乏しいとして上位に挙げられた項目が、履修後の質問では列挙されなかったことがそれを示している。また、本科目は指導技術を磨く演習ではなく講義科目であったにも関わらず、履修後に指導技術に関する項目が知識が十分として上位を占めたことは、非常に興味深い。不安感については、先述の知識の向上に連動する形で、履修者は知識不足から生じる不安をある程度は払拭することができたといえよう。しかし、学生はカリキュラム、単元計画、指導案の作成、そして英語の発音に引き続き大きな不安を残している。千葉大学は、先の3項目について「総合的な学習の時間（小学校英語演習）」という科目で実際にカリキュラムを考え、指導案を練り、「総合的な学習の時間（実践）」でその指導案をもとに小学校で実践するという時間を設けている。また英語の発音については「総合的な学習の時間（小学校英語の音声指導）」という科目で、講義形式になるが自身の発音を向上させることと児童への音声指導についての知識を提供している。受講者がこれらの科目を全て履修することが前提ではあるが、不安をうまく解消することができるカリキュラム編成であるといえる。

今後、入門科目以外の3科目での履修者の知識、不安感の変化を引き続き追跡し、最終的に履修者がどの程度自信を持って卒業を迎えられるのか、また履修学年や時期で知識、不安感の変化に違いはあるか、継続研究が必要であると考える。

資料1 質問紙（外国語活動に関するアンケート）

外国語活動に関するアンケート					
	学籍番号	名前			
このアンケートは、これからあなたが履修しようとしている「総合的な学習の時間（小学校英語入門）」に関するアンケートです。よりよい授業を作っていくための参考資料として教員が使用します。成績評価には影響しません。これに同意して頂ける方は、記入をお願いします。					
1-1. あなたが小学校教員になったら、外国語活動の時間を担当することになります。外国語（おおむね英語）を小学生に教えることになるわけですが、以下の項目を十分に理解しているかどうか教えて下さい。なお、各項目は外国語活動を担当する皆さんにぜひ知っておいて頂きたく、この授業で扱うことを予定しているものです。					
	よく理解している	いくらか理解している	どちらでもない	あまり知らない	全く知らない
1 外国語教育が公立小学校に導入されるようになった経緯	5	4	3	2	1
2 日本の公立小学校で外国語教育をはじめの意義	5	4	3	2	1
3 公立小学校における英語導入の背景	5	4	3	2	1
4 公立小学校における英語導入の現状	5	4	3	2	1
5 国際理解教育ということば	5	4	3	2	1
6 国際理解教育と「外国語活動」の時間の関係	5	4	3	2	1
7 「外国語活動」の時間と、中学校、高校の英語の授業との繋がり	5	4	3	2	1
8 小学校教員のための「外国語活動」研修	5	4	3	2	1
9 校内でできる外国語活動に向けての環境づくり	5	4	3	2	1
10 教室内でできる外国語活動に向けての環境づくり	5	4	3	2	1
11 「外国語活動」（以下、授業とする）で使用できる教授法	5	4	3	2	1
12 授業の目標設定	5	4	3	2	1
13 授業で指導する内容	5	4	3	2	1
14 教員が授業で使える英語表現	5	4	3	2	1
15 教員が知っておいたほうがよい文法事項	5	4	3	2	1
16 英語の発音のコツ	5	4	3	2	1
17 教員が授業で使う教具の上手な作り方	5	4	3	2	1
18 教員が授業で使う教具の上手な選び方	5	4	3	2	1
19 CD、DVDなどの音声教材活用法	5	4	3	2	1
20 インターネット、電子黒板などのマルチメディア活用法	5	4	3	2	1
21 授業で小学生が使う教材の上手な選び方	5	4	3	2	1
22 授業で小学生が使う教材の上手な作り方	5	4	3	2	1
23 カリキュラム（1年間の指導計画）の作り方	5	4	3	2	1
24 1単元（2～4クラス）の組み立て方	5	4	3	2	1
25 指導案（1クラス）の書き方	5	4	3	2	1
26 1時間の授業での活動のつなげ方（どういう順番でどんな活動をするか）	5	4	3	2	1
27 授業の評価	5	4	3	2	1
28 ALT（Assistant Language Teacher）との関わり方	5	4	3	2	1
29 子どもの言語習得（言葉をどのように学んでいくか）	5	4	3	2	1
30 アジア（台湾、韓国、中国）の英語教育	5	4	3	2	1
31 児童・発達心理学の観点からみる子ども（動機、態度、自尊心）	5	4	3	2	1
32 低学年に対する指導法	5	4	3	2	1
33 高学年に対する指導法	5	4	3	2	1
34 リスニングの指導	5	4	3	2	1
35 リーディングの指導	5	4	3	2	1
36 スピーキングの指導	5	4	3	2	1
37 ライティングの指導	5	4	3	2	1
38 歌・リズムの指導	5	4	3	2	1
39 絵本を用いた指導	5	4	3	2	1
1-2. 上記の項目以外で、あなたが外国語（おおむね英語）を教えるために知っておくべきだと思うことがありますか。もしあれば、それを記述して下さい。いくつでも構いません。					
2-1. あなたが小学校教員になって、外国語（主に英語）を教えるとき、不安を感じるのはどの項目ですか。					
	非常に不安である	やや不安である	どちらでもない	あまり不安でない	全く不安でない
1 外国語教育が公立小学校に導入されるようになった経緯 (中略)	5	4	3	2	1
39 絵本を用いた指導	5	4	3	2	1
2-2. 上記の項目以外で、あなたが不安を感じるのは、どの項目ですか。もしあれば、それを記述して下さい。いくつでも構いません。					
ご協力ありがとうございました。					

## 引用文献

- 岡 秀夫・金森 強 (2007)『小学校英語教育の進め方—「ことばの教育」として』成美堂
- 久埜百合・佐藤令子・永井淳子・粕谷恭子 (2006)『ここがポイント！小学校英語』三省堂
- 小林美代子・宮本 弦 (2007)「公立小学校教師たちの英語指導観—公立小学校教員への意識調査より—」小林美代子 (編)『早期英語教育の指導者養成および研修の実態と将来像に関する総合的研究』平成16～18年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)平成18年度研究成果報告書, pp. 37-86
- JACET教育問題研究会 (2009)『英語教員の質的水準の向上を目指した養成・研修・評価・免許制度に関する統合的研究』平成20年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書, pp. 33-43
- 直山木綿子 (2008)『ゼロから創る小学校英語』文溪堂
- 松川禮子・大城 賢 (2008)『小学校外国語活動実践マニュアル』旺文社
- 物井 (山賀) 尚子 (2009)「小学生を対象とした情意尺度の開発」『平成20年度東京純心女子大学紀要』No. 13, 27-36
- 物井尚子 (2010)「小学校教職課程に期待されるもの—「外国語活動」授業力向上のために大学が提供できるシラバスを考える—」『平成21年度東京純心女子大学紀要』No. 14, 1-9
- 文部科学省 (2008a)『英語ノート指導資料 第5学年 試作版』文部科学省
- 文部科学省 (2008b)『英語ノート指導資料 第6学年 試作版』文部科学省
- 文部科学省 (2008c)「小学校英語活動実施状況調査結果概要 (平成19年度)」文部科学省のホームページ[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/20/03/08031920/002.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/03/08031920/002.htm). 2009年6月15日
- 文部科学省 (2008d)『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東京書籍
- 文部科学省 (2009a)「小学校教諭の教職課程等における外国語活動の取り扱いについて (通知)」文部科学省のホームページ[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kyoin/1268607.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kyoin/1268607.htm). 2010年9月3日
- 文部科学省 (2009b)「平成20年度公立学校教員採用選考試験の実施状況について」文部科学省のホームページ[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/senkou/1217797.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/senkou/1217797.htm). 2009年7月20日.
- 文部科学省 (2009c)「平成21年度学校基本調査速報 統計表一覧 (初等中等教育機関, 専修学校・各種学校)」文部科学省のホームページ[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/001/08121201/1282480.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/08121201/1282480.htm). 2009年8月1日
- 山賀尚子 (2007)「小学生を対象とした情意尺度の開発」『平成18年度東京純心女子大学紀要』No. 11, 11-22
- 吉田研作 (2008)『21年度から取り組む小学校英語—全面実施までにこれだけは』教育開発研究所

## 注

- 1 本稿では「小学校英語」と「外国語活動」をほぼ同義として使用している。近年「小学校英語」は小学生を対象にしたよりスキルに踏み込んだ英語教育とされ、「外国語活動」とは一線を画す傾向がある。本稿では、この違いは議論の中心ではないこと、また紙面の関係から両語の区別はしない。
- 2 有意差の求め方であるが、参加者の質問紙の回答32名分を履修前、履修後ののべ64名分のデータが得られた。これをラッシュモデルにかけ、stackingを行った。これによって抽出される64名分のperson logit scoresを対応のあるT検定にかけ、その結果が本文にまとめたものである。ページ数の都合上、細かな統計に関する説明は割愛する。